

与えられた区間における非線形方程式の全解計算法

M2006MM006 堀場 慎吾

指導教員 杉浦 洋

1 はじめに

科学技術の分野において、非線形方程式 $f(x) = 0$ の解を求める問題がたびたび現れる。

本論文では、非線形方程式の零点を求める方法として、Graeffe 変換法を紹介する。これは多項式に対する Graeffe 変換 [1] を解析関数に拡張することによって、単位円周上の零点を求める方法である。またそれを FFT(Fast Fourier Transform) によって高速に計算する事が可能になる。

さらに、区間 $[-1, 1]$ の全ての零点を求める実 Graeffe 法についても述べる。これは、ある変数変換を介して複素 Graeffe 法と等価である。

最後に、数値実験によりその有効性を確認する。

2 高速 Fourier 変換による関数近似

2.1 複素離散型 Fourier 変換

周期 2π の解析的周期関数 $f(t)$ の関数近似には、分点 $t_l = 2\pi l/n$ ($0 \leq l < n$) 上の離散型 Fourier 展開

$$f_n(t) = \sum_{k=-m}^{n-m-1} c_k e^{ikt} \cong f(t), \quad c_k = \frac{1}{n} \sum_{l=0}^{n-1} f_l e^{-\frac{2\pi i}{n} kl}$$

が用いられる。ここで、標本値 $f_l = f(t_l)$ ($0 \leq l < n$) である。

離散型 Fourier 係数 c_k ($-\infty < k < \infty$) は周期性 $c_{k+n} = c_k$ を持つ。整数 m は誤差が小さくなるように適切に定める。標本値 f_l ($0 \leq l < n$)、離散型 Fourier 係数 c_k ($0 \leq k < n$) の関係は、

$$c_k = \frac{1}{n} \sum_{l=0}^{n-1} f_l e^{-\frac{2\pi i}{n} kl}, \quad f_l = \sum_{k=0}^{n-1} c_k e^{\frac{2\pi i}{n} kl}$$

である。標本値 $\{f_l\}$ から係数 $\{c_k\}$ を一斉に効率的に計算する算法が FFT(Fast Fourier Transform)、逆に係数 $\{c_k\}$ から関数値 $\{f_l\}$ を計算する算法が IFFT(Inverse FFT) である。計算量は、共に $O(n \log n)$ である。

被近似関数 $f(t)$ が解析的なら、 $f_n(t)$ の精度は良好である。 $f(t)$ が複素平面の幅 $2d$ の閉帯領域 $B_d = \{z \mid |\operatorname{Im}\{z\}| \leq d\}$ で解析的なら、

$$|f_n(t) - f(t)| = O(r^m + r^{n-m}), \quad r = e^{-d}$$

である。

2.2 離散 Laurent 展開

関数 $f(z)$ が円環領域 $r \leq |z| \leq r^{-1}$ ($r < 1$) で解析的なとき、その関数近似には、離散型 Laurent 展開

$$f_n(z) = \sum_{k=-m}^{n-m-1} c_k z^k, \quad c_k = \frac{1}{n} \sum_{l=0}^{n-1} f_l e^{-\frac{2\pi i l}{n} k}$$
 ($0 \leq k < n$)。を得る。ここで、 $T_k(x) = \cos(k \cos^{-1} x)$ は k 次 Chebyshev 多項式である。

が用いられる。標本値 $f_l = f(e^{2\pi i l/n})$ である。変数変換 $z = e^{it}$ により、周期関数 $F(t) = f(z)$ の離散型 Fourier 展開を $F_n(t)$ とすると、 $f_n(z) = F_n(t)$ となる。すなわち、FFT、IFFT は離散型 Laurent 展開の高速計算法でもある。また、誤差も複素 Fourier 変換の誤差理論により解析できる。

2.3 実離散型 Fourier 展開

関数 $f(t)$ が実解析的周期関数ならば、その近似には、実離散型 Fourier 展開、

$$f_{2n}(t) = \frac{1}{2} a_0 + \sum_{k=1}^{n-1} (a_k \cos kt + b_k \sin kt) + \frac{1}{2} a_n \cos nt,$$
$$a_k = \frac{1}{n} \sum_{j=0}^{2n-1} f_j \cos \frac{2\pi kj}{n}, \quad b_k = \frac{1}{n} \sum_{j=0}^{2n-1} f_j \sin \frac{2\pi kj}{n},$$

が用いられる。標本値 $f_l = f(\pi l/n)$ ($0 \leq l < 2n$) である。

実離散型 Fourier 展開は、複素離散型 Fourier 展開の実部であるので、FFT により高速に計算できる。さらに、データの対称性を利用した効率的なアルゴリズムが、RFFT(Real FFT)、IRFFT(Inverse RFFT) である。その計算量は FFT、IFFT の約半分となる。

2.4 離散型 cosin 展開

関数 $f(t)$ が実偶関数ならば、離散型 Fourier 展開は、

$$f_{2n}(t) = \sum_{k=0}^{n''} a_k \cos kt, \quad a_k = \frac{2}{n} \sum_{l=0}^{n''} f_l \cos \frac{\pi kl}{n} \quad (0 \leq k \leq n)$$

となる。これを離散型 cosine 展開という。ここで、 \sum'' は、初項と末項を半分にした総和である。この展開係数と関数値の計算は FCT(Fast cosine Transform)、IFCT(Inverse FCT) により、高速に遂行でき、演算量は RFFT、IRFFT のさらに半分である。

2.5 離散型 Chebyshev 展開

区間 $[-1, 1]$ で定義された実連続関数を $f(x)$ とする。 $F(t) = f(\cos t)$ は周期 2π の実周期偶関数であるので、離散型 cosine 展開

$$F_{2n}(t) = \sum_{k=0}^{n-1''} a_k \cos kt$$

は分点 $t_l = \pi l/n$ ($0 \leq l \leq n$) 上の $F(t)$ の補間である。両辺に $t = \cos^{-1} x$ を代入すると、離散型 Chebyshev 展開

$$p_n(x) = F_{2n}(\cos^{-1} x) = \sum_{k=1}^{n-1''} a_k T_k(x)$$

を得る。ここで、 $T_k(x) = \cos(k \cos^{-1} x)$ は k 次 Chebyshev 多項式である。

この計算は、FCT, IFCT で高速計算可能で、計算量は、RFFT, IRFFT のさらにほぼ半分である。関数 $f(x)$ が楕円 $E_r = \{z \in \mathbf{C} \mid |z-1| + |z+1| = r + r^{-1}\} (r < 1)$ の内部及び円周上で解析的なら、誤差は

$$|p_n(x) - f(x)| = O(r^n) \quad (x \in [-1, 1]).$$

3 単位円周上の零点問題

3.1 複素 Graeffe 変換

3.1.1 単位円周上の Graeffe 変換

単位円周上の解析関数 $f(z)$ の m 重複素 Graeffe 変換を

$$f^{[m]}(z) = G_m f(z) = \prod_{j=0}^{m-1} f(\omega_m^j \sqrt[m]{z})$$

で定義する。ここで Graeffe 変換の回数を μ とし、 $m = 2^\mu$ である。

また、 $\omega_m = e^{2\pi i/m}$ は原始 m 乗根である。特に $G = G_2$ を単に Graeffe 変換と呼ぶ。

n 次多項式 $f(z) = \prod_{l=0}^{n-1} (\alpha_l - z)$ の Graeffe 変換は、

$$G_m f(z) = \prod_{l=0}^{n-1} (\alpha_l^m - z) \text{ となり、零点の絶対値の比 } |\alpha_l|/|\alpha_k| \text{ が強調されて } |\alpha_l|^m/|\alpha_k|^m \text{ となる。}$$

我々のアルゴリズムに対し、次の定理は本質的である。

定理 1 単位円周 $|z| = 1$ 上で、解析的な関数を $f(z)$ とし、その m 重 Graeffe 変換を $f^{[m]}(z)$ とする。 $f(z)$ の単位円周上の零点を ζ_1, \dots, ζ_k とし、

$$p(z) = \sum_{k=1}^K (z - \zeta_k)$$

とする。このとき、ある整数 L と、複素定数 C が存在して、

$$\frac{f^{[m]}(z)}{(-1)^{(m-1)L} C^m} \sim z^L p^{[m]}(z). \quad (1)$$

ここで $F^{[m]}(z) \sim G^{[m]}(z)$ は、 $\lim_{m \rightarrow \infty} \frac{F^{[m]}(z)}{G^{[m]}(z)} = 1$ が単位円周上一様収束であることを意味する。

式 (1) より、 m が大きい時に、 $f^{[m]}(z)$ は、

$$z^L p^{[m]}(z) = z^L \sum_{k=0}^K c_k z^k$$

のほぼ定数倍に等しい。すなわち、この多項式の項数 $K+1$ により、単位円周上の零点の個数 K がわかる。

3.2 高速複素 Graeffe 変換

$f(z)$ が単位円板上で、解析的な場合を考える。このとき、式 (1) の L は、単位円内部の零点の個数である。 $f(z)$ の補間点 $\{\omega_n^l\}_{l=0}^{n-1}$ 上での補間多項式

$$f_{n-1}(z) = \sum_{k=0}^{n-1} a_k z^k, \quad a_k = \frac{1}{n} \sum_{l=0}^{n-1} f_l \omega_n^{-kl} \quad (0 \leq k < n)$$

を作る。係数 a_k は、FFT より高速に計算できる。

次に $f_{n-1}(z)$ に対する、高速 Graeffe 変換のアルゴリズムを構成する。 $f_{n-1}(z)$ の Graeffe 変換

$$g_{n-1}(z) = f_{n-1}^{[2]}(z) = \sum_{k=0}^{n-1} b_k z^k$$

を計算する。

単位円周上の零点の個数を求める高速 Graeffe 変換を以下のように処理する。

1. $f_l = f_{n-1}(\omega_{2n}^l) = \sum_{k=0}^{n-1} a_k \omega_{2n}^{kl} \quad (0 \leq l < 2n)$ を IFFT で計算する。

2. $g_l = f_l f_{n+l} \quad (0 \leq l < n)$ を計算する。

$$f_l f_{n+l} = f_{n-1}(\sqrt{\omega_n^l}) f_{n-1}(-\sqrt{\omega_n^l}) = g_{n-1}(\omega_n^l)$$

である。

3. $b_k = \frac{1}{n} \sum_{l=0}^{n-1} g_l \omega_n^{-kl} \quad (0 \leq k < n)$ を FFT で計算する。なお、この計算量は $O(n \log_2 n)$ である。

このアルゴリズムで

$$f_{n-1} \rightarrow f_{n-1}^{[2]} \rightarrow \dots \rightarrow f_{n-1}^{[2^\mu]}$$

を順次計算することができる。

これで $p^{[m]}(z) (m=2^\mu)$ が求まった。その次数から、単位円周上の解の個数 K と、単位円内の解の個数 L が求まる。

3.3 単位円周上の零点を求めるアルゴリズム

m 重 Graeffe 変換後の多項式の解によって取り出した多項式 $p^{[m]}(z)$ の全ての根を求める。ここで得られた解 α は、元の方程式の解の $m = 2^\mu$ 乗になっているため、その m 乗根のすべてを、 $f(z)$ に代入して、0 になったものを解とする。この処理も FFT で高速に計算可能である。 α の偏角を $\theta = \arg(\alpha)$ とすると、求める解は、

$$\beta_l = e^{i(\frac{\theta}{m} + \frac{2\pi l}{m})}$$

のどれかとなる。数値計算では、これらを近似多項式 $f_{n-1}(z)$ に代入し、十分 0 に近くなった β_l を解とする。

$$f_{n-1}(\beta_l) = \sum_{k=0}^{n-1} a_k e^{ik(\frac{\theta}{m} + \frac{2\pi l}{m})} = \sum_{k=0}^{n-1} (a_k e^{ik\frac{\theta}{m}}) e^{\frac{2\pi i k l}{m}}.$$

これは、 $a'_k = a_k e^{ik\frac{\theta}{m}}$ を係数とする離散型 Fourier 展開の、周期 2π の m 等分点の値であり、IFFT により高速に計算できる。しかし、計算効率を上げるため、項数 n と、 $m = 2^\mu$ の大小関係によって、異なる前処理を行う。

I $m \geq n$ のとき、

$$f(\beta_l) = \sum_{k=0}^{m-1} a'_k e^{\frac{2\pi i k l}{m}}, \quad a'_k = a_k e^{\frac{k\theta}{m} i} \quad (0 \leq l < m),$$

$$a'_k = 0 \quad (n \leq k < m)$$

とし、FFT で計算する。

II $m < n$ のとき、

$m = Jn \quad k = jm + M$ とすると、

$$f(\beta_l) = \sum_{M=0}^{m-1} \sum_{j=0}^{J-1} \left(a_{jm+M} e^{\frac{(jm+M)\theta}{m} i} \right) e^{\frac{2\pi i}{m}(jm+M)l}$$

$$= \sum_{M=0}^{m-1} a'_k e^{\frac{2\pi i}{m} M l},$$

$$a'_k = \sum_{j=0}^{J-1} a_{jm+M} e^{(j\theta + \frac{M}{m}\theta) i}$$

として、FFT で計算する。

いずれの場合も $f(\beta_l) = 0$ となった β_l が求める解となる。

4 有限区間上の零点問題

4.1 実 Graeffe 変換

$[-1, 1]$ で解析的な実関数 $f(x)$ の Chebyshev 展開を、

$$f(x) = \sum_{k=0}^{\infty} a_k T_k(x) = \frac{1}{2} a_0 + \sum_{k=1}^{\infty} a_k T_k(x)$$

とする。これを $x = \frac{z+z^{-1}}{2}$ と変数変換したものを $F(z)$ とする。この $F(z)$ に 3 章の Graeffe 変換を適用し、単位円周上の零点の数 $2K$ を得れば、 $f(x)$ は $[-1, 1]$ 上に K 個の零点を持つことがわかる。この操作を直接 $f(x)$ の実 Graeffe 変換 H として解釈する。 $z = e^{it}$ とすると、

$$F^{[2]}(z) = GF(z) = f\left(\cos \frac{t}{2}\right) f\left(\cos \left(\frac{t}{2} + \pi\right)\right)$$

$$= \sum_{k=0}^n b_k \cos kt = \sum_{k=0}^n b_k T_k(x) = Hf(x).$$

これを一般化して、 m 重実 Graeffe 変換 H_m を、以下のように定義する。

$$H_m f(x) = f^{[m]}(x) = G_m F(z) = \prod_{j=0}^{m-1} F(\omega_m^j \sqrt[m]{z})$$

$$= \prod_{j=0}^{m-1} f\left(\cos \frac{2\pi j + t}{m}\right) = \prod_{j=0}^{m-1} f\left(\cos \frac{2\pi j + \cos^{-1} x}{m}\right).$$

$f(x)$ の $[-1, 1]$ の零点を β_l ($1 \leq l \leq K$),

$$p(x) = \prod_{l=1}^K (x - \beta_l), \quad f(x) = p(x) \tilde{f}(x)$$

とすると、 $\tilde{f}(x)$ は $[-1, 1]$ で零点を持たない解析関数となる。

$$F(z) = p\left(\frac{z+z^{-1}}{2}\right) \tilde{f}\left(\frac{z+z^{-1}}{2}\right) = P(z) \tilde{F}(z)$$

おくと、式 (1) の左辺は、

$$\frac{F^{[m]}(z)}{(-1)^{(m-1)L} C^m} = \frac{P^{[m]}(z) \tilde{F}^{[m]}(z)}{(-1)^{(m-1)L} C^m}$$

となる。ここでは、 $L = 0$ となるので、

$$\frac{f^{[m]}(x)}{C^m} = \frac{F^{[m]}(z)}{C^m} \sim P^{[m]}(z) = p^{[m]}(x).$$

さて、 $\beta = \cos \tau = \frac{e^{i\tau} + e^{-i\tau}}{2} = \frac{\omega + \omega^{-1}}{2}$ とおくと、

$$(x - \beta)^{[m]} = \left(\frac{z+z^{-1}}{2} - \beta\right)^{[m]} = (-1)^{m-1} (x - \cos m\tau),$$

$$= (-1)^{m-1} (x - T_m(\beta))$$

である。よって、

$$p^{[m]}(x) = \prod_{l=1}^K (x - \beta_l)^{[m]} = (-1)^{K(m-1)} \prod_{l=1}^K (x - T_m(\beta_l)).$$

以上より、次の定理を得る。

定理 2 $f(x)$ が $[-1, 1]$ に K 個零点を持つのなら、 $f^{[m]}(x)$ は、 K 次多項式に近づく。

十分大きな m で、 $f^{[m]}(x) \cong c p^{[m]}(x)$ である。 $f(x)$ の零点を β_l ($0 \leq l \leq K$) とすると、 $p^{[m]}(x)$ の零点は、 $\alpha_l = T_m(\beta_l)$ ($1 \leq l \leq K$) である。すなわち、 β_l は、代数方程式 $T_m(x) = \alpha$ の m 個の解の一つである。

4.2 高速実 Graeffe 変換

n が 2 の中のとき、 $f(x)$ の n 次離散型 Chebyshev 展開

$$f_n(x) = \sum_{k=0}^{n''} a_k T_k(x) \cong f(x)$$

を求める。標本値 f_l 、係数 a_k は、

$$f_l = f\left(\cos \frac{\pi l}{n}\right) = \sum_{k=0}^{n''} a_k T_k\left(\cos \frac{\pi l}{n}\right) \quad (0 \leq l < n),$$

$$a_k = \frac{2}{n} \sum_{l=0}^{n''} f\left(\cos \frac{\pi l}{n}\right) \cos \frac{\pi k l}{n} \quad (0 \leq k < n)$$

となり、それぞれ IFCT、FCT で高速に計算できる。この計算回数は $O(n \log_2 n)$ である。

次に、 $g_n(x) = f_n^{[2]}(x) = \sum_{k=0}^{n''} b_k T_k(x)$ の係数 $\{b_k\}$ を以下のアルゴリズムで高速計算する。

1. $f_l = f_n(\cos \frac{\pi}{2n}l)$ ($0 \leq l \leq 2n$) を IFCT で計算する.
2. $g_l = f_l f_{2n-l}$ ($0 \leq l < n$) を計算する. $f_l f_{2n-l} = f_n(\cos \frac{\pi}{2n}l) f_n(-\cos \frac{\pi}{2n}l) = g_n(\cos \frac{\pi}{n}l)$ となる.
3. $b_k = \frac{2}{n} \sum_{l=0}^{n''} g_l \cos \frac{\pi kl}{n}$ ($0 \leq k < n$) を FCT で計算する.

このアルゴリズムで

$$f_n \rightarrow f_n^{[2]} \rightarrow \dots \rightarrow f_n^{[2^\mu]} \cong p^{[m]}(x)$$

を順次計算することができる.

これで, $[-1, 1]$ の解の個数が求められたので, その個数だけ解を求めることによって, 我々の問題は解決する.

4.3 有限区間上の零点を求めるアルゴリズム

$m = 2^\mu$ (μ は整数で Graeffe 変換の回数) とし, 多項式 $P^{[m]}(z)$ の零点 $\alpha_1, \dots, \alpha_K$ をなんらかの方法で求める. 我々の数値実験では Durand-kerner 法を用いた.

$T_m(x) = \alpha_k, t = t_l = \frac{\tau + 2\pi l}{m}, x = \beta_l = \cos \frac{\tau + 2\pi l}{m}$ ($0 \leq l < m$) を f に代入し, $y_l = f(\beta_l) = 0$ となった β_l が解である.

$$y_l = \sum_{k=0}^{n''} a_k \left(\cos \frac{k\tau}{m} \cos \frac{2k\pi l}{m} - \sin \frac{k\tau}{m} \sin \frac{2k\pi l}{m} \right) \\ = \sum_{k=0}^{n''} a'_k \cos \frac{2\pi kl}{m} + \sum_{k=0}^{n''} b'_k \sin \frac{2\pi kl}{m}. \quad (2)$$

ここで, $a'_k = a_k \cos k\tau/m, b'_k = -a_k \sin k\tau/m$ である. これは, IRFFT で高速計算できる.

ここで, 計算効率を上げるため, 項数 n と, $m = 2^\mu$ の大小関係によって, 異なる前処理を行う.

I $n < \frac{m}{2}$ のとき,

$$y_l = \sum_{k=0}^{m/2''} a'_k \cos \frac{2k\pi l}{m} + \sum_{k=1}^{m/2-1''} b'_k \sin \frac{2k\pi l}{m} \quad (0 \leq l < m)$$

を IRFFT で計算する. ただし, $a'_k = b'_k = 0$ ($n < k \leq \mu/2$), $a'_n \leftarrow a'_n/2$ とする.

II $n = m/2$ のとき,

式 (2) をそのまま IRFFT で計算する.

III $n = m$ のとき,

三角関数の対称性 $\cos(-x) = \cos x, \sin(-x) = -\sin x$ を用いて級数を畳む. すなわち, $a''_k = a'_k + a'_{\mu-k}, b''_k = b'_k + b'_{\mu-k}$ ($0 \leq k \leq m/2$) により,

$$y_l = \sum_{k=0}^{m/2''} a''_k \cos \frac{2k\pi l}{m} + \sum_{k=1}^{m/2-1''} b''_k \sin \frac{2k\pi l}{m} \quad (0 \leq l < m)$$

と変形し, IRFFT で計算する.

IV $n > m$ のとき,

三角関数の周期性を用いて級数を縮める. すなわち,

$$\tilde{a}_k = \sum_{i=0}^{n/m-1} \tilde{a}_{im+k}, \tilde{b}_k = \sum_{i=0}^{n/m-1} \tilde{b}'_{im+k} \quad (0 \leq k < m) \\ y_l = \sum_{k=0}^{m''} \tilde{a}_k \cos \frac{2k\pi l}{m} + \sum_{k=1}^{m-1''} \tilde{b}_k \sin \frac{2k\pi l}{m} \quad (0 \leq l < m)$$

と変形し, III に帰着させる.

5 数値実験

実 Graeffe 変換を用いて, $[-1, 1]$ の解を求めるプログラムを C 言語で組み, 数値実験を行った. 関数,

$$f(z) = (z - 0.3)(z - 0.29999) \exp(z)$$

を用いて数値的に困難とされる近接零点の近似を行った. $f(z)$ の解は $z = 0.29999, 0.3$ である.

Fourier 展開の項数 $n = 32$, $\mu = 5$ 回 Graeffe 変換をかけ, その係数を出力し, 第 3 章の理論に従って解釈した,

$$m = 2^5 = 32 \text{ のとき,}$$

$$|c_k| \leq 10^{-14} \quad (k = 3, \dots, 31 \text{ のとき})$$

$$c_0 \approx 1$$

$$c_1 \approx 0.6778556990232384$$

$$c_2 \approx 0.1788385174660971.$$

よって $f_{n-1}(z)$ は, 解が 2 個あることがわかる. Durand-Kerner 法 [2] を用いて二つの解

$$\alpha_1 = -0.9476342748563671,$$

$$\alpha_2 = -0.9475270937038849$$

を得た. これを用いて, $f_{n-1}(\beta_l)$ を計算し, 10^{-10} 以下の値を 0 であると判断し, $f(x)$ の解とすると,

$$x = 0.2999900000400602, 0.2999999999596771$$

となった. 誤差は共に 10^{-10} 以下である.

6 おわりに

複素平面単位円周上の解析関数の零点を全て求める複素 Graeffe 変換法と, 実区間 $[-1, 1]$ 上の解析関数の零点を全て求める実 Graeffe 変換法を提案した. それぞれについて, FFT を用いた高速変換アルゴリズムを開発し, C 言語で計算機実装と, 数値実験を行った.

実験結果はおおむね良好で, 零点の個数と, 位置が理論通り計算できた. しかし, Graeffe 変換後に近接零点が現れ, 近似の精度を劣化させるといった問題点が発見された. この克服が今後の課題である.

参考文献

- [1] Anthony Ralston and Philip Rabinowitz: A FIRST COURSE IN NUMERICAL ANALYSIS Second Edition, DOVER PUBLICATIONS, INC (2001).
- [2] 山本哲朗: 数値解析入門, サイエンス社 (1976).